

会議記録

名 称	南丹市中学校給食在り方検討委員会〔第3回〕	
開催年月日・開催場所	平成23年9月28日（水） 午後1時30分～午後3時30分 南丹市役所 2号棟 301会議室	
出席者名	委 員	(出席委員) 大谷貴美子、木村 茂、辻村美春、中藤昌明、山崎賢司、 山崎幸代、植田理恵、松村雅枝、渡邊春幸
	事務局及び 庁内PT委員	(事務局) 森教育長、西田学校教育課長、西田学務係長、坂瀬総括指導主事 (庁内PT委員等) 教育総務課（山口課長補佐） 社会教育課（松村社会教育主事）
傍聴人	なし	
配布資料	資料① 「南丹市給食在り方検討委員会」第2回会議録 資料② 弁当の意義に関する他市の事例抜粋 資料③ 中間まとめ（案） 資料④ パブリックコメントを含めた今後の進行資料	
議事の概要	1 開会宣言 2 教育長挨拶 3 報告 ・第2回会議の概要報告【事務局】 4 協議 (1) 弁当の意義を踏まえた学校給食の在り方の視点から【事務局】 ①弁当の意義について ②弁当の意義を踏まえた学校給食における取組について (2) 中間まとめ（案）について 5 その他 ・事務局からの報告事項 第4回検討委員会の開催日時の確認 6 閉会	
会議の経過	別紙のとおり	

■教育長あいさつ■

ご多用の中、第3回検討委員会に出席賜り、お礼を申し上げます。

第1回、第2回の検討委員会の中で中学校給食の導入にあたり、あらためて食に関わる中学生の現状や課題の分析、更には、南丹市の地元食材の活用や、地域の伝統食を学校給食に位置づけることの意義について論議をいただいた。

今日はその検討の上に、本市の中学校給食に家庭で作られてきた弁当の取組を位置づけるべきかどうかを中心にご議論いただきたい。

この間、南丹市教育委員会としても、親子あるいは家庭の中での絆を確かめ合うひとつとして、弁当の意義を考えてきたし、重視をしてきたところである。

中学校の学校現場で弁当の意義を踏まえた取組が必要なかどうかを、みなさんがそれぞれの立場で、ご論議を深めていただきたい。併せて1回目、2回目の議論のいただいたことを市民にオープンにするため本日ご論議いただいた内容も含めて検討委員会の中間のまとめということで、パブリックコメントにかけていきたい。また、市政懇談会の場でも中間まとめを報告し、直接市民の方々から意見を聞くという場も設定したい。パブリックコメントでの意見、市政懇談会での意見をもとにまとめて第4回の検討委員会で報告し、今後の検討にいかせていただきたい。

→第2回議事録の説明 資料1のとおり 承認

→資料2の説明 大阪府岸和田市他2市のアンケート結果

→資料2の説明に対する補足をする。これらの事例はいずれの市も、これまで中学生に家庭弁当をもたせてきた市が、学校給食を導入するに際して、弁当の意義を再確認しながら給食導入の検討をされてきた事例である。

○ 南丹市では美山中学校のような一斉の給食と、必要な生徒に限るスクールランチとのどちらを検討しているのか。

→具体的なプランをつくる前提としてこの検討委員会を設置している。従来の市教委の考えは「弁当の意義が大きいから、給食についての議論は差し控えてきた」ということであった。

しかし、今日の社会状況、保護者のニーズ、更には美山中学校で学校給食を実施し他の中学校では実施していないというアンバランスを解消する必要があるとの考えから、学校給食を実施する必要があるという決定を今年の3月に行った。また、どういう学校給食を実施するのかということを検討するためこの検討委員会を設置した。弁当給食の意義を踏まえるならどういう形で学校給食に位置づけるのが望ましいのかなどについて議論してほしい。

○弁当の意義について

○美山中学校では、給食のない日は弁当になるが、その日は好きなものを入れてもらって、配膳時間が要らないのでリラックスして話をしながら食べている。親からは弁当には野菜を入れら

れない、夏の間は腐りやすいので入れるものが限られる、との話を聞いている。

○ 親として子どもの弁当を入れてきた経験から、子どもが何をどれだけ食べているのかということは、弁当であればなぜ残したのかと聞けるし、健康チェックができる。

また、弁当についても工夫をする、直接身体に入り物であるので気を使う。そういう部分では大変であるが、給食になったらそれで終わり、とういことでは子どもとどう向きあうのかということになる。そういう面では弁当は子育てという意味において大きな意味がある。

ただし、一方ではお金を渡し、「コンビニで弁当を買いなさい」という親もいるので、どちらが良いとはいえない。

○ 先ほどあったように弁当を作ることで体調管理をするということは確かにある。反面、お金だけを渡す親もある。すると子どもは好きなものだけ買う、たとえば炭水化物ばかりのものを買う、ということが起こっている。修学旅行や大きな学校行事のときは朝が早いときもあるが弁当を入れてやってほしい。こどもがそちらの道に行くのか、いかないかの瀬戸際になったときに踏みとどまるのは、そういう愛情のこもった弁当を入れてもらってきた家庭の子どもではないかなと思う。そこで入学説明会等では、なるべく家庭弁当を入れてもらうように説明をしている。

○ 地域的に脳卒中、心臓病、癌で亡くなる方が多かったり、要介護状態になられる方が認知病や脳卒中が多かったり、国保で受診される方に高血圧の方が多いというデータがある。この地区はかつて「さば街道」と呼ばれ、塩分の多い食生活の時代があった。弁当もそういうものを入れることが多かった。弁当の意義を考えると本人によるが、家に帰ってきて、かばんの中から弁当を出して包みを解いて台所で出して洗って伏せておく、ということが行われていた。子どもが家庭の台所つながる接点であった。弁当は栄養バランスとしては課題があるが、家庭との接点と言う意味では意義がある。

○ 保護者の中には一生懸命お弁当をつくる人も、お金だけ渡す人もいる、そういう中でみんなに栄養バランスのとれた給食を提供することはよいことである。弁当を入れてもらって親に感謝するのは、自分が親になって子どもに弁当を入れるようになってから、という人の方が多い。

南丹市健康づくり協議会で、小学生にお弁当作りをさせてはどうかという話になっている。「弁当を買いなさい」といってお金だけ渡す親を変えるには、教師が言っても変わらないので、子どもを変えたら大人が変わる、との考えで実践している学校は結構ある。その取組として弁当の日を作ってみよう、ということで話が進んでいる。これは、食材を買うところから、最後洗って伏せるところまで子どもにさせる。こどもは全てを一人で出来る子は少ないので、大体お母さんが手伝う、その弁当を学校に持って行って「これは、私が作った弁当です」と言っても後ろめたさが残る。それが相互作用を起こして次はもっといいものを、次の次はもっとももっといいものを、というふうに変わっていく。そうすると、親も変わっていくはずであるので、そういうことを目指して、「お弁当の日」を作って1年生からはじめて6年生まで観察していくことを考えている。

中学生は半分大人で、栄養もたくさん必要で欠食になると困るので、給食は与えるが、弁当はどうするのか。中学生に、「給食費を払っているから、『いただきます』とは言わない。」という

子が出てきたら、「それは意味が違う」ということになる。

中学校で食育を進めるなら、昼食の残飯を捨てずに活用し、鶏を育てる、そして卵や鶏糞を活用する。最後は大きくなった鶏をつぶして食べる。かわいがってきた鶏を殺して食べる、ということ、それで、今の人間社会の仕組み、人が育てたものを殺していただいているということが自然と判るようになり「いただきます」ということばが自然と出てくるようになる。

そういう考える力を、実践を通して養うことが大切である。今の自分たちが何によって存在できているのかを知らせる機会としたい。中学校給食でそういう取組をすれば生徒のためになると思うし、親も変わってくると思う。中学校にはそういう取組を期待したい。

○ 弁当の意義としては、ひとつは親の意識をどう変えるか、ということがある。弁当では子どもの好きなものを入れられる、との話があったが、好きなものだけ入れて喜んでいいのかとの思いがある。また、弁当というのは親の愛情であるので台所とこどもの接点を求めていくのも意義がある。さらに、塩分のことが出たが、幼稚園ではキャラクター弁当が流行っていて、やたらふりかけがかかっている。白いご飯とおかずを交互に食べるということがそこで崩れている。小学校で子ども達が食べる様子を見ると、時間が短いということもあるが、先日は魚の煮つけだったが、おかずをご飯にかけて食べている。そのおかずがなくなると別のおかずをご飯に載せて食べている。ご飯の食べ方が崩れている。給食がよいのか、弁当が良いのか悩むところである。弁当の良い部分、学校給食の良い部分が色々あると思うが、この地域では弁当でやってきて、これからは学校給食を始めるなら、これまでの弁当の良いところをどう残していくのかということ議論していきたい。先ほど委員から意見があったとおり、残飯をつかって命の教育をしていくことも大切だ。弁当を作ると言っても親が作る場合と、子どもがつくる場合がある。その辺はどうか。

○ 親に任したら作る人は作るし、作らない人はお金を渡し、買いなさい、ということにならないか。

○ 美山にはコンビニがないのでお金で買うことができない。子どもにつくらせるなら1品ずつ作り方を教えて段階を踏んでいけば可能である。はじめはあるもの、作ってもらったものを弁当に詰めることから始めることになる。学校給食と弁当の日をいきなりスタートするのではなく、どちらかからすこしずつ進めていった方がよい。

○ 美山中学校の給食の様子を見ると、準備も片付けも整然としている。話も集中してしっかり聞ける、弁当の日を導入するなら、まず美山中学校から始めればよい。

○ 美山の少年野球の日曜日の練習では、白いおにぎりだけの弁当を何年も続けてきた。夏でも傷みにくいのと、親でも自分でもできるから、ということであった。中学校で、弁当の日をするなら、栄養バランスはさておいて、自分でも出来るおにぎりでもよいと思う。すべてでなくてそういうところがあってもよいと思う。

○ 創意工夫とか人と比べるということは必要なことである、社会に出ると必ず優劣がつくので、同じようにしないで、他人の弁当をみて、気付く、葛藤がある、ことがあるようにした方がよい。

学校が乱れているところは、給食を食べている所と掃除をしている所を見ればすぐにわかる。

美山中学校では整然とされているが、他の中学校で出来るかどうかはわからない。

○ 子どもがサッカーをしていて日曜日の弁当はおにぎりであるが、親がそれぞれ工夫をしているいろんなものを巻いたり、中にいろんなものを入れたりしている。それをお互いに真似ながら工夫を重ねた経験がある。おにぎりでも工夫をすればいろんなことができる。

○ 給食をスタートさせることが第1である。スタートさせるためには施設や設備を含めて大きな労力が必要である。時間をかけながら軌道に乗せていかなければならない。そういう部分の悩みが大きくて、弁当の意義を活かすことの大切さは認識しているが、学校給食の円滑なスタートの方に問題意識が行っている。なかなか弁当の方まで考えが及ばない。

○ それでよいのでないか。まず、給食をして、その中で、弁当を活かすことを考えればよい。美山中は給食を既にしてしているので弁当の日は取り入れやすいと思うが、他は様子を見たらよい。

また、小学校で、「この組合せは何だ」と思うような献立の組合せについては、献立をつくった側からいうと「栄養バランスは取れている」ということだろうが、子どもに意見を聞く、フィードバックさせる、そういう機会を設けるべきと思う。

○ 弁当の意義は「無言の親と子のコミュニケーション」である。給食を始めるにあたってそのコミュニケーションを何か置き換えるものはないかということだと思うが、その辺はどうか。

○ 小学校の場合は親の意識は、朝食にどんなものを食べさせているかというアンケートで大体わかる。中にはほとんどおかずがない状態でご飯だけ食べている子どももあり、そういう場合は栄養教諭とも連携し、指導をしている。そうすると少しずつ品数が増えてくる。

弁当でも同じことが言える。保護アンケートの中で中学校給食についての考えでは「食育の推進」の次に「保護者の負担軽減」があがっている。相当忙しい実態がある。弁当の日を作るなら学校の調理実習を親にも伝えるなど地道な準備をしていくことが大切と思う。子が中学校に入る際には保護者に「栄養バランスの取れた弁当作りをしましょう」と言うメッセージを送っている。

○ 小学校とどう連携するかも大切である。小学校で調理実習プログラムの実習で得たことを活用し、高校に入るころには自分で弁当が作れるようになればよい。

○ ひとりで生きていける。弁当も作れる。妻が亡くなって夫1人になってラーメンも作れずにインスタントラーメンをそのままかじる、そういう風になると困る。子どもが下宿しているが、最初は作れないが、だんだん作れるようになる。中学校、高校から少しずつ作れるようすることも教育の一環として必要なことである。

- 大学生になると下宿することも多いが、食の自立ができないと身体を壊す原因になる。
- 弁当を入れるのは親の責任だと思ふ親と、何かを食べさせておけばよい、という親があり、ギャップが大きい。一本化するには段階を踏まないと難しい。また、作る方と食べる方がよくコミュニケーションをとることが大切である。
- 大震災があったが、今後起こらないとは限らない、そこで、中学校になったら、たとえば山に逃げたときに何が食べられて何が食べられないのか、そういう教育も必要だと思う。私らの年代なら「わらび」や「あけび」を取ったりしたが、今の子どもはそれさえ知らない。そういうことも教育として、食育の一環として取組んでほしい。
- 他市で小鳥の声を聞き分ける授業を受けたあと、通学で聞く鳥の声を聞くのがとても楽しくなった、ということがあった。身の回りにあるものに気付くということは大切なことである。

○弁当の意義を踏まえた学校給食における取組について

- 家庭によって格差が大きいので、子どもが成長する基本的な栄養を確保するという意味において給食の意義は大きい。弁当だと子どもの好きなものを考慮して入れることになるが、給食だと多様な食材を使うので、いろいろな食材や調理方法を知るという意味において給食の意義は大きい。
- 中学校を卒業する子から給食のレシピを下さいといわれることがある。給食をしていて良かったと思う。美山中学校はランチルームがあり配膳に 10 分ぐらいはかかるが、集中して食べやすい面がある。これから始めるところは、教室で食べることになると思うが、配膳時間を効率的にして、味わって食べることのできる時間を確保することが大切と思う。食育とセットで環境面も考えていってほしい。
- 小学校も給食の時間は短い。だからご飯におかずを掛けて食べる子がいるのかもしれない。ぜひ中学校給食では必要な時間を確保してほしいと思う。
- 食の時間をしっかりとるとするのは、弁当であれ、学校給食であれ変わらないことであると思う。
- 弁当だと配膳する時間が不要である。
- 弁当を中学生が時間をかけてゆっくり食べているのかどうか、その実態は給食と変わらないほどの状況になっていないかどうか、という思いを持っている。食をとおした指導は弁当のときも大事だし、給食のときも大事である。そういう点を考えれば弁当であれ、学校給食であれ、子

ども達に食の大切さをしっかりと日常的に指導していく。この姿勢が学校に求められている。そこでひとつ具体例を言うと、中学校ではほとんど土曜日は弁当である。学校給食になってもほとんどの生徒が部活をしているので土曜日は家庭で弁当を作ることになる。土曜日だけ弁当にするのか、他にもたとえば水曜日も弁当にするのか、弁当の意義と重要性を考えた取組と学校給食を通した食育の指導内容を充実させていくという取組の両方をミックスするような検討も必要でないか。

○ 私の学校ではだいたい練習は午前中に終了する。ただ、午後に練習試合がある場合は弁当を持ってきている。水曜日を弁当にするとしたら弁当の意義を賞賛される保護者も多いので理解してもらえらると思う。一方で弁当を作ることが負担で大変だと言う保護者も多い。給食によって保護者の負担が軽減される、だから給食をしてほしいという保護者も多い。こどもも週に1回ぐらいは好きなものを食べたいと言うのが正直なところだと思うので、給食導入の際に週に1日、弁当の日を作って、中学校でも家庭科の時間に食育を進めるのもいいのかなと思う。京都府内にはないが、他府県には動物のと殺から精肉まで指導している学校もある、先ほど鶏の例があったが、そういう取組をすればおのずと命をいただきますということで、「いただきます」という意味が理解できるようになると思う。小学校の調理実習から中学校の調理実習、マイ弁当、マイ弁当コンクールなどもあるがそういう取組みにより食に関する意識は高まっていくと思う。教育課程に位置づけた取組として週に1度の弁当の日はしてもよいかと思う。

○市の食育推進のプランづくりの中でもマイ弁当の理論を進めていると聞いたが。

○ 先ほど委員からもあったが、健康づくり推進協議会で小学校高学年の子どもが買い物から始めて自分で作るというマイ弁当の取組を計画している。地域の現状を見ていると、こどものころから健康づくりを推進していくことによって健康づくりについての考えが地域ぐるみで変わっていく、ということで計画をしているところである。今後学校に依頼し、可能であれば取組みたいと考えている。子どもに弁当を作らせるという香川県で先進的に取組まれてきた内容である。

○ 林間学校で、材料は栄養士が準備するが、子どもたちにすべての食事の調理をさせるという取組があった。初日はひどいものであったが、上手な子の仕方を見ながら3日目になるとかなり上手になる。調理の面白さや友達から学ぶことを知ることになる、そういうメリットがあった。

○ さきほど私が提案したのは、地域の方に教わりながら1年生から6年生までの縦割りの集団をつくって、今度はどんなものをつくるかを考えて1年間のプランを立てて余ったものは道の駅で売りに行く、その資金を次の活動に活かす、そういう話をしていて、マイ弁当の話に繋がってきた。中学校の場合ははじめから子どもをつくる弁当の日を設けるとは言えないので、親をつくる弁当の日になると思う。

○ 経験的に言うと、給食になるといつも決まった子の給食が遅い、といわれるようになる。今まで自分の量で食べていたものが、いきなり5日になる給食になると大変である、苦痛になる子

もあると思うので、週のうち1日は弁当の日にした方が、負担が少ないのではないかと。

- 中学校給食でもっとも厳しいのはその準備と片づけで時間をとられてしまうことである。弁当の日を作るか作らないかは学校運営上の問題であるので現場で状況を見ながら判断したらよい。給食を始めるにあたってはむしろ、時間をどう工面するかと言うことが大きな問題であると思う。もうひとつは、これまで好きなものだけ食べてきた子ども達が画一で出される給食にスムーズに入れるかなという点である。段階的に導入できないかと思う。
- 小学校まで給食であっても、中学生だとスムーズにいかないか。
- 小学校は給食だが中学校になったら弁当で好きなものが食べられる、との思いもあると思う。
- 段階的に考えると言うのはどちらを主に段階的と考えているのか。
- 食材の関係、調理の献立、調理の場所、等を勘案すると、弁当を主としながらも給食を入れていく、その方が中学校としてはやりやすいのではないかと。給食の日をつくるという感じである。
- カフェテリア方式で自由にとって食べるなら別だが、いま想定しているのは給食当番が配食して行くという方式である。やはり、慣れることが必要で当番は大体1週間単位で代わるが、1週間毎の当番でようやくなれるのが週末金曜日ぐらいである。だから、週に1回の学校給食というのは現実的には困難ではないか。
- 段階的導入についてであるが、小学6年は給食には慣れているので、まず中学校1年生から次に2年生、3年生という様に学年先行という調整が出来ればよいのではないかと。
- 段階的な導入が可能であれば、まず、1年生から、その次は2年生、次、3年生というふうにできればよい。また、中学生のカロリーに主眼を置き、小学生と同じメニューにするなら、食べる量を増やすしかないことになるが、中学生になると個人差が大きくなるので、別メニューで考えてもらう方が望ましいと思う。
- 1つの調理場で小学校用と中学校用のメニューを別に調理することは、施設の・設備的にも、人的にも極めて困難である。美山町調理場は主に量の調節で対応している。
- 食育のための給食であるので、そんなに子どもに合わせる必要があるのか、小学校は給食で同じものを食べてきて、中学校になったら好きなものを食べさせる、という現状はどうか、むしろ大きくなった方が同じものを食べる経験をさせる必要があるのではないかと、と思う。
- 地域性もあるので美山でその量を食べるのが可能であっても、他の町だと生徒によっては難しいかもしれない。

○ 海外の例であるが、ビュッフェスタイルの学校であるが、最終地点でカロリー量をチェックする学校ある。

○ 弁当から給食にすることは単に親の負担を減らすというだけではない。

しっかりした目的があるのでそこは譲らないほうが良い。まずその考えがあって、弁当を持ってきた子どもに対する一定に配慮はあってもよい。施設・設備についてであるが、対応については、どういう施設、設備でどういう人員、体制で行うかによっても変わってくる。

○ それぞれの調理場での実施を考えていて、量についても絶対にこれだけは食べなさい、とういことなしに、学校と調理場が子ども達の実態を踏まえながら相談しながら対応していくことになる。

○ 弁当であろうが、給食であろうが、食べるということは食材等に対する感謝の気持ちを持って、食事を楽しんで、ゆっくり味わうと言うことは学校においても、家庭においても、とても大切なことで、特に家庭では学校ほど時間の制約がないと思われる。要は学校給食を通じて親自身をどう変えていくのかが問われてくる。

弁当を作るのが困難な親もある中できちんと栄養バランスのとれた給食を提供することは意義のあることであるが、そのことに加えて、親がどうかかわっていくかのメッセージを伝えることが問われている。南丹市として、みんなに誇れる内容の給食を実施していただきたい、中学校では時間に追われているといわれたが、食べることに集中できる時間、環境づくりについて考えていかないといけない。

まず、ふりかけをやめる。白い飯を味わえる子どもを育てることが必要である。また、非常食を食べる機会があってもよいと思う。「弁当の日」の取組も含めて柔軟性をもった給食であってもよい。以上で2つ目の論点である「弁当の意義を踏まえた学校給食における取組について」の議論とする。ここで事務局に一端お返しする。

→ 中間まとめ案について 別添資料3により説明

パブリックコメントについて資料4により説明

意見については集約し、次回の検討委員会で報告する。

○ 中間まとめ案について承認

教育長挨拶

人間が食べると言うことは、動物がえさを与えられるということとは次元が違うことであり、人間が食べるということは心が膨らんでいく、心身の発達を増進させていく、そして、そのことが生きる力を育むことになると思う。今後とも南丹市らしい中学校給食の実現に向けて引き続きご検討願いたい。